

# オテケン山からバグダードまで

— 6～8世紀の世界史叙述の試み —

小林 聡 埼玉大学教育学部社会科教育講座

キーワード：世界の一体化、突厥、唐、アッバース朝

## 1. はじめに

「高校世界史」の教科内容は様々な問題を抱えているとされる。たとえば、多くの日本人にとって「世界史」という語は、「日本を除外した外国の歴史」という意味で使われることが多いが、これは、言うまでもなく、無意識に高等学校の科目区分をベースにして歴史を語っているからである。こういった日本史と世界史の断絶の問題に対処するために、2009年の「高等学校学習指導要領」では「世界史B」について、「日本と世界の諸地域の接触・交流」について留意すべきことを方針としている。その他、「世界史B」の指導要領には、最新の歴史学の知見に基づいた改変が適宜加えられているものの、指導要領に通底する「世界史」理解の枠組みや、その基盤となる歴史観は、従来のそれを大きく変わるものではない。そのため、さらなる根本的な変革を要求する声は後を絶たない。たとえば、羽田正氏は、現行世界史には、①日本人の世界史である点、②自と他の区別や違いを強調する点、③ヨーロッパ中心史観から自由でない点という3つの問題点があるとし、「現在私たちが学び、知っている世界史は、時代に合わなくなっている。現代にふさわしい新しい世界史を構想しなければならない」と主張する<sup>1)</sup>。また、李成市氏は、ヨーロッパ人の描く“世界史”が16世紀以降のヨーロッパ人の世界拡大にともなうヨーロッパ固有の歴史的課題に答えるために構想された歴史であったという上原専祿氏の議論を踏まえ、東アジアの人々が自らの歴史的課題に答えるための世界史を新たに構想していかねばならないと主張している。李氏の論は世界史教育自体を論じたものではないが、問題意識を共有しているといえる<sup>2)</sup>。

さて、現行世界史教科書の構成と現在の歴史研究の乖離が大きい部分として、16世紀前後のいわゆる“大航海時代”のとらえ方やイメージがあるように思われる。「世界はいつ、どのようにして一体化したのか」という問いに対する解答として、当該時期が大きな画期であるのは間違いないが、これを過度に重視しているのではないかという疑念を振り払うことができない。また、すでに様々な批判が試みられているが、“世界システム論”もまた16世紀を重視するという意味では、伝統的な歴史イメージとそう大きな隔たりはないといえる。では、16世紀以前の段階で、“世界の一体化”というべきなんらかの変動があるとすれば、それはどの時期にどのような動きとして現れたであろうか。まず、想起されるのが、13世紀におけるモンゴル帝国によるユーラシア統合の時期を強調する見解である。たとえば、アブー＝ルゴド氏は、“13世紀世界システム論”を提唱し、モンゴルの征服活動が、13世紀には中国からヨーロッパの間に存在した8つの地域的交易圏のネットワーク化をもたらし、これらをサブシステムとして、その上部にこれらをゆるやかにまとめる世界システムが成立していたとする<sup>3)</sup>。また、国内では、杉山正明氏がフビライの統治期を画期として、“アフロ＝ユーラシア交流圏”が成立したことを説く。この交流圏の成立とともに、中華地

域にあつては「小さな中国」から「大きな中国」へという転換が起こり、中東にあつてはペルシア語を主体とする「東方イスラーム圏」とアラビア語文化の「西方イスラーム圏」の併存現象と、テュルク・モンゴル軍事権力を中核とするイスラーム国家のパターンが確立したとし、さらに、現在のロシアからウズベキスタンにかけての地域がユーラシア規模のモンゴル流通経済に巻き込まれ、やがてこれがユーラシア帝国ロシアへとつながるとする<sup>4)</sup>。

また、さらに時代を遡ってアッバース朝時代に“世界の一体化”が達成されていたとする見解もある。たとえば、家島彦一氏は、7世紀前半に始まる展開の中で他世界に影響を及ぼし続けたという点で、イスラーム世界を世界史の中軸として認識し、ダウ船の行き交うダウ・カルチャーの世界を軸にして、7世紀から10世紀までを中心に内陸交通をも含めたイスラームの国際ネットワークの全体像を描いた<sup>5)</sup>。また、宮崎正勝氏は、アケメネス朝・秦漢帝国・ローマ帝国のような「世界帝国」の範囲をはるかに越え、広域におよぶネットワークをシステム化することによって作られた「ネットワーク帝国」の段階を想定し、「イスラーム帝国」こそが史上初の「ネットワーク帝国」であるとし、8世紀半ばから10世紀半ばまでにおけるアッバース朝の時代をシステム化された帝国ネットワークと帝国外部のネットワークが相互に結びついた時代として評価する<sup>6)</sup>。さらに、佐藤彰一氏は、交易圏の分断と統一という観点から見る時、ヘレニズム時代において一つに統合されていた地中海圏とインド洋交易圏が、ローマ・ビザンツ帝国とサーサーン朝の両帝国によって分割されていた状態を経て、イスラームの覇権によって一つに接合されたという歴史観を提示するとともに、アッバース朝時代において、バグダードやサーマッラーという巨大都市を中心とし、アフロ＝ユーラシアの東西南北各地域へと伸びる交通路を動かす世界システムが存在していたことを前提に、フランク王国の歴史的な位置づけを行っている<sup>7)</sup>。

以上、モンゴル帝国重視論とアッバース朝重視論という二つの見解を概観したが、本稿では後者の見解に立ちつつ、アッバース朝時代の交通ネットワークが生まれた前提として、ユーラシア諸国が外交的に影響を与え合う“国際社会の成立”とでも言うべきものがいつ頃生まれたのかを、6世紀までさかのぼって素描を試みる。もとより、本稿は実証論文ではなく、筆者の通常の研究テーマともやや距離がある。しかし、「いつ世界は一体化したのか？」という問いは、(日本史も含めた)世界史の大きな問題であり、世界史をどのように構成し、受講者に提示していくのかという問題は、筆者が勤務する教育学部が負うべき問題であると思うので、この機会に拙いながらも現時点での見通しを述べてみたいと思う。

## 2. 一体化の前提としての6世紀前半

アッバース朝によるアフロ＝ユーラシア規模のネットワークが存在していたとしても、それは、アッバース朝が一朝にして築き上げたものではないはずである。とすれば、この巨大ネットワークが形成される端緒はどのようなものであろうか。筆者なりに時代を遡って因果関係を探っていくと、アッバース朝成立の約200年前、6世紀半ばに一つの契機があるのではないかと考えるようになった。それは、この時期に至って、東は朝鮮半島から西は地中海に至るまでの国々が互いに連動し合って“国際社会”というべきものを形成していったと思われるからである。こうして形成された“国際社会”は、その後7世紀後半における突厥の没落と唐とウマイヤ朝によるいわば“G2時代”の出現や、8世紀半ばの安史の乱を契機とした唐の事実上の分裂を経て、8世紀後半に至ってバグダードを中心とする、アッバース朝のアフロ＝ユーラシア規模のネットワーク形成に至るという

見通しを筆者は立てている。

この節では、まず、筆者が画期として考えた6世紀半ばの前段階にあたる、6世紀前半の世界情勢から説き起こすことにする。この頃の西部ユーラシアでは、まず、ビザンツ帝国(東ローマ帝国)帝国の存在が大きいが、ユスティニアヌス一世(在位527～565年)が550年代までにカルタゴ・イタリア・イベリア半島の一部など、地中海沿岸の大部分を支配することに成功していた。しかし、ビザンツもバルカン半島ではスラブ人、シリア方面ではサーサーン朝に対して受け身にならざるを得ない状況であった。サーサーン朝は内陸シルクロードの要衝を押さえる地政学的にも重要な位置にあったが、5世紀後半以降、シルクロード東方から勢力を拡大してきた大国エフタルの圧迫に苦しむという状況であった。

一方、南北朝時代後期にあたる6世紀前半の中国においても様々な動きがあった。5世紀末、北魏孝文帝は一連の改革事業、中でも平城から洛陽への遷都(494年)や、貴族の序列を国家が人為的に作り上げようとする“姓族詳定”に象徴されるような“漢化政策”を断行した<sup>8)</sup>。この急速な漢化政策に対する北族の反動が六鎮の乱(523年)となって噴出し、群雄割拠の時代を経て、535年には北魏は分裂して東魏と西魏が対峙するようになる。一方、南朝においては502年に梁王朝を創始した武帝(在位502～549年)が西晋時代以来長らく編纂されていなかった律令や、公私にわたる規範体系たる礼制をまとめた儀注を編纂し<sup>9)</sup>、また、508年には貴族制社会の再編を試みたりして国家体制の刷新を図っている<sup>10)</sup>。かくして、梁は内政面や社会面に様々な問題を抱えつつも、前述の北朝の混乱が北からの軍事的圧力を軽減させるという僥倖もあって、南朝史上最盛期を迎えることができた。

“世界の一体化”という観点から注意すべきは、この時期の中国は南北各々に“帝国”を持ち、各々の天下観を育てていった点である。やや遡ってこの点を考えてみよう。3世紀後半に三国鼎立を終結させた西晋王朝は、礼制に基づいて諸制度を再編していき、最終的には周囲の民族をも含めた洛陽を中心とした礼制世界を構築しようとした。この王朝は中国統一後30年あまりで滅亡し、華北では五胡十六国の動乱期に移行するが、司馬氏王朝を復興する形で樹立された東晋は江南の建康を首都としたが、現実には胡族に占拠されている洛陽を礼制上の中心として想定する天下観を持ち続けた。戸川貴行氏によると、この天下観に変化が現れるのは450年以降の北魏の大規模な南進による南朝宋王朝の領土喪失以降のことである。北魏の南進は宋に打撃を与え、これを契機にして宋の孝武帝(在位453～464年)は実際に首都を置いている建康を中心とする天下観に基づいて国家儀礼の整備を行ったという<sup>11)</sup>。これは正統王朝を標榜する王朝としては大幅な転換といえるが、北魏の躍進と宋の敗退は、朝鮮半島諸国や倭国など東アジア諸国の外交にも影響を与えた事件でもあったことにも注意すべきであろう<sup>12)</sup>。この天下観の変化にともなう、南朝の国際秩序もまた建康を中心として組み直されることになる。もともと、南朝は北魏の周辺の諸国に官爵を与えて“冊封体制”内に取り込み、対北魏包囲網を形成しようとする外交政策をとっていた<sup>13)</sup>。その天下観は、6世紀前半に梁王朝のもとで作成されたいわゆる『梁職貢図』という形で現在に伝えられている。蕭繹(後の元帝)作とされる『梁職貢図』は、梁の武帝治世における朝貢国(実際には朝貢していないと思われる国も含む)の使節の姿を描いたもので、現在、各種の模本や題記が残されており、最近、不明であった新羅・高句麗などの題記逸文が発見されたことでも有名である<sup>14)</sup>。作成当初は35箇国の使者が描かれていたとされ、東は朝鮮三国と倭、西はエフタル・サーサーン朝や西域諸国、南は東南アジア諸国や天竺諸国、北は柔然などが含まれるが、梁との通交が容易ではない国々も登場する。榎一雄氏は、中国における職貢図の起源を探る中で、梁時

代になって初めて職貢図が作成された背景として、梁の武帝が儒教的価値観とともに、仏教のみを唯一の正道たることを宣言（504年）し、東南アジア・南アジア諸国との関係を見据えて、仏教による世界の統一というプランを構想しており、こういった新しい世界観が職貢図を編纂した背景であったと考える<sup>15)</sup>。『梁職貢図』の胡密壇国についての題記には、同国が上表中において武帝を「揚州天子・日出処大国聖主」と称したことが記され、まさに建康を中心とする天下観に沿った表現がなされている。

また、鈴木靖民氏は、「梁は遠近様々な諸国、すなわち『職貢図』本来が記載する35国の中心に位置し、梁を頂点とする国際秩序、国際関係形成されており、換言すれば中華世界、東部ユーラシア世界を構築していた。または中国、梁中心の国際観念を東部ユーラシア・サイズで形成していたのである」とし、梁・エフタル・インドの各々が周辺諸国を従えた「地域圏」を持ち、これらの「地域圏」同士の接触・交流が、戦争・外交・貿易となって現れたとする<sup>16)</sup>。これに関連して、前述のエフタル・ビザンツ帝国・サーサーン朝の3大国間の関係に注目した張爽氏は、5世紀後半～6世紀前半の時期、エフタルは自らの軍事力や、支配下にあったソグド人を活用してシルクロード貿易を掌握し、この結果、中国・サーサーン朝・ビザンツをも巻き込んだ政治的・経済的な国際関係が生まれたとする<sup>17)</sup>。後述の突厥をめぐる国際関係と比較して、エフタルは中国諸王朝との間でシビアな外交交渉や戦争を経験しておらず、ユーラシアをまたぐ成熟した外交関係はいまだ成立していないように思われるが、その萌芽はこの頃にあったとみてよいだろう。

なお、諸国の使節の来朝を描いて自国の中心性を誇示する方法は、他地域にも見られる。フランツ＝グルネは、660から663年の間に造営されたと見られる、サマルカンド王ワルフマーンの宮殿に比定されるアフラシアブ遺跡の壁画を、『新唐書』西域伝が言及するクシャーニーヤ国の壁画、あるいは『フェールスナーマ』に記されたホスロー一世（在位531～579年）時代におけるサーサーン朝の宮廷の構図などと対比し、6・7世紀、サーサーン朝やソグディアナ諸都市の宮廷においては、東ローマ・中国・インド・エフタル・突厥などの使節を描く共通の伝統があったことを指摘する<sup>18)</sup>。これらの例は、『梁職貢図』の構図にも通じるものであり、各国が各々の表現によって自国の中心性を表現したと見ることができる。

さて、このように梁は倭国から中央アジアに至る世界の頂点に立つ天下観を形成していったが、これに対して北朝はどのような天下観を持ったのであろうか。三崎良章氏によれば、北魏は南朝との対抗関係の中で、東・西・南方に「藩屏」国を置いて、その君主に官爵を与えて冊封体制に取り込み、南朝と柔然の連絡を絶とうとする戦略を持っており、たとえば、華北を統一してまもない440年代であれば、高句麗・吐谷渾・仇池が3方面の藩屏として認識されたという<sup>19)</sup>。ただし、このような外交戦略は、現実の国際情勢の動きに対して脆弱であり、三崎氏の分析によると藩屏の構成国は470年以後、北魏の分裂に至るまで、東方の高句麗との関係以外は入れ替わりがあり、安定した冊封体制があったわけではないようである。なお、南北の勢力が交わる地帯には、陝西省西南部一帯には氏族系の仇池とその後継諸国家、あるいは羌族系の宕昌・鄧至といった小国家が連なり、また河南省南部一帯には田氏や桓氏等の「蛮酋」が自治的な勢力を形成していた<sup>20)</sup>。したがって、南北の勢力が直接接するのは、5世紀末で言えば、漢中・上洛一帯と、淮南を中心とする淮水流域に限られていた。これらの国家・勢力の多くは吐谷渾や高句麗と同様、南北双方から官爵を受けており、緩衝地帯としての機能のみならず周囲に四夷を配する天下観を双方の王朝が維持するための重要な存在となっていたとも言えよう。

このように5世紀段階では北魏の天下観はそれほど成熟したものとは言えなかったが、6世紀

に入ると北魏の天下観はより確固としたものになる。川本芳昭氏によれば、北魏の初期においては北族と漢族がお互いを異質な存在として排除し合う意識が強かったが、北魏太武帝（在位423～452年）の頃から胡漢融合の試みがなされ、孝文帝の漢化政策を経て胡漢融合が全面に打ち出されたという<sup>21)</sup>。氏はこういった北魏の政策を総括して、「鮮卑による漢族の文化・制度の受容がただ単なる模倣・同化ではなくして、それ以前のあり方を純化・集大成し、それ以降の時代の範例を創造した」ものであり、「秦漢の中華」ではなく、新都洛陽を中心とした「新たな中華」を目指したものであったとする。こういった一連の改革を経た北魏王朝においては、南朝を「島夷」と称した例や、遷都後の洛陽に四夷館（南朝から帰順した者を収容する金陵館を含む）・四夷里を設けた例（『洛陽伽藍記』巻3、龍華寺）からわかるように、正統王朝を標榜する南朝をも夷狄視した北魏独自の天下観が形成されていったという<sup>22)</sup>。

こうして、5世紀後半から6世紀前半にかけて、南朝は建康、北朝は洛陽をおのおの中心とする天下観を築いていき、周辺諸国は実際には重なり合う二つの帝国理念のもとで、各々の利益に沿って外交を展開していくことになるが、南朝と北朝の対峙、勢力の均衡は、周辺諸国にとっては中国王朝との衝突の可能性が低く、また外交の選択肢が多いというという意味では、都合がよい時代であったのかもしれない。

### 3. 6世紀半ばから後半にかけてのユーラシア各地の変動

前節では、6世紀前半の世界情勢を概観したが、本節では同世紀半ば以上の変動について見ていく。6世紀半ばにおける最も大きな事件として、巨大遊牧帝国突厥の成立がまず挙げられる<sup>23)</sup>。それまで柔然に服属していた突厥は、6世紀半ばに族長土門のもとで強大化していき、短期間に東西に勢力を伸ばしていった。まず、545年から翌年にかけて西魏と使節を交換して貿易の利権を握ろうとし、551年には西魏と通婚関係も結び、552年には土門は柔然からモンゴル高原一帯の覇権を奪って土門はイルリグ可汗を称する。これが突厥第一可汗国である。さらにイルリグ可汗の弟とされる西面可汗シルジブロス（ディザブロス、あるいはイステミ可汗とも称される）は西方に勢力を伸ばしていき、当時東からエフタルに圧迫されていたホスロー一世治世のサーサーン朝と同盟してエフタルを破った（558年）。こうして、突厥は中央ユーラシアに覇権を確立するに至ったが、これはこの時すでに華北に至るまでの商圏を作り上げていたソグド人の故郷も支配下に収めたことをも意味する。

東西に長く広がる突厥は、必然的に勢力範囲を接する様々な国に影響を与えたが、突厥とは直接関係のない地域でも様々な変動があった。中国内で第一に挙げるべき事件は、548年に梁で起こった侯景の乱である。侯景の乱は、その前年に東魏から梁に亡命してきた侯景が、その後の梁・東魏間の和平交渉に反発して挙兵し、梁の首都建康を陥落させた事件であるが<sup>24)</sup>、侯景による建康包囲以後、梁国内では皇室諸王や各地の土豪が自立して群雄割拠の状態となり、同時に東魏（550年に北齊にかわる）や西魏（557年に北周にかわる）の侵略・干渉に苦しんだ。557年に至って陳霸先が陳王朝を樹立し（武帝；在位557～559年）、564年頃には第2代皇帝の文帝（在位559～566年）が江南の群雄をほぼ平定するが、この頃までに北朝諸国が旧梁王朝の領土を奪っており、南朝没落の色は覆うべくもなかった。その一方で、北朝、特に西魏王朝は552年に安陸・竟陵の地を、553年に益州全体を、554年には梁元帝が抛る江陵を陥落させるなど、梁領を奪って急速に大国化していく<sup>25)</sup>。特に、江陵陥落によって元帝政権に仕えていた多くの南朝貴族を長安に移住させた

ことは、辺境の軍事国家から中国文明の諸要素を具有する国家への転身に大きく寄与したであろう。

西魏による益州征服は、梁やそれを継いだ陳の国力を削いただけではなく、南朝が有していた帝国理念に大きな打撃を与えた。とりわけ南朝と吐谷渾の間の通交が絶たれたことが重要である。和田博徳氏によれば、孝文帝期以降において北魏が対外積極策を停止すると、吐谷渾王の伏連寿はその隙を突くように西域に進出していき、これによって吐谷渾を仲介役とする西域諸国の梁王朝への朝貢ルートができあがったとする<sup>26)</sup>。西域諸国の梁への朝貢開始は、そのこと自体、6世紀になってより顕著になったグローバルな国際関係の一環であるが、梁王朝の帝国理念が実態と近づくために吐谷渾は多大な貢献をしたともいえる。先述の『梁職貢図』に西域諸国の使節が描かれたが、これは吐谷渾の貢献を象徴するものといえよう。ところが、553年の西魏による益州征服や同年の吐谷渾遠征によって、建康～成都～吐谷渾～西域というルートが断ち切られて西方諸国の内陸ルートによる朝貢は不可能になり、南朝の帝国性を弱めることとなったのである。

こうして、6世紀半ば、中国において南朝の衰退・ローカル王朝化と、北朝諸王朝、特に西魏・北周政権の強大化が10年足らずの間に進行した。川本芳昭氏は、この頃の華北においては、かつてのような北族と漢族の対立はほぼ解消されており、胡漢が融合した新たな中華世界がこの時点で生まれていたこと、西魏・北周が『周礼』に基づく制度改革に代表される“漢化”と、胡姓再行に代表される“胡族化”という一見相反するベクトルを持つ諸改革を行えたのは、まさに民族融合が進んだ状況が前提になっていると指摘する<sup>27)</sup>。このように新しい歩みを始めていた北朝諸王朝であるが、外交面を見ると、突厥に対しては従属せざるをえない状況にあった。東魏の実質的建国者である高歡は、540年頃には梁・柔然・吐谷渾との通好によって、西魏に対する包囲網を作り上げていたが、これに対して、西魏は高歡が画策した対西魏包囲網の打破をはかって、先述のように545年に新興勢力突厥との通好を試みた。まもなく起こったモンゴル高原における柔然から突厥への覇権交代は、西魏・北周にとって有利に働く一方、東魏・北齊は陳・突厥・契丹などに対する南北両方面での軍事行動に追われる状況になった<sup>28)</sup>。ところが、563～4年における北周の北齊に対する遠征失敗を見た突厥は北周に失望し、北周・北齊を互いに牽制させる外交政策に転換していく。平田陽一郎氏によれば、突厥のタトパル可汗（在位572～581年）は、即位前から崇仏皇帝たる北齊の文宣帝（在位550～559年）を“英雄天子”として敬愛していたこともあって、即位後、仏教を媒介にした北齊との関係強化を志向するようになったが、このことは廃仏を進めていた北周武帝（在位560～578年）に対抗して、同国の仏教勢力との連係を図る意味もあったという<sup>29)</sup>。先述の545年における西魏との通好開始にはソグド人が関係しており、突厥側からすれば貿易の利益獲得が通好の目的であったようであるが、ここに至って、北周からの貢納に近い贈与に加えて、これよりはるかに巨大な生産力を持つ北齊からの贈与をも獲得することになり、突厥宮廷の財政的基盤はより強固になったと言える。このような経緯で両国は競って突厥に“貢納”して彼らの関心を引こうとするようになった。タトパルの“両箇児”が孝順であれば、我々は物資の不足に悩まされることはない”という有名な言葉はこの頃の状況を述べたものである。

ところで、朝鮮半島においても突厥の圧迫は及んでいたらしい。『三国史記』高句麗本紀は、551年に突厥が高句麗に侵攻し、遼東北部の新城や白巖城を包囲したことを伝える。551年は突厥が柔然を打倒する直前であり、繫年にやや疑問が残るが、この記事が事実であるとする、同年に百済・新羅連合軍が高句麗を討ってその領土を奪ったことと考え合わせて、百済・新羅は突厥の高句麗に対する圧迫を利用して高句麗への侵攻に及んだのではないかと考えることができる<sup>30)</sup>。

この時、百済に漢江流域の6郡を、新羅に竹嶺以北10郡を奪われた高句麗は甚大な打撃を受けた。『日本書紀』は、その少し前の545～6年に高句麗において王位継承をめぐる争いが起きていたことを伝え、また漢江流域失陥後の557年には旧首都の丸都城で反乱事件が起こっており、この時期の高句麗においては王権弱体化・権力中枢の内部分裂が進行していたとされる<sup>31)</sup>。

朝鮮半島の政治的変動はさらに進行する。新羅の真興王（在位534～576年）は、まもなく百済との間の対高句麗同盟を解消し、552年以降、百済が攻め取ったばかりの漢江下流をも侵食しはじめ、554年には管山城で百済の聖王（在位523～554年）が新羅側に殺されるに至った。真興王はその後も対外攻勢の手を緩めず、562年に大伽耶を滅ぼして朝鮮半島南部に対する支配権を強め、この結果、新羅は朝鮮半島南半部の大動脈ともいべき漢江流域から洛東江流域にかけての帯状の地域をほぼ掌握するに至る。真興王はこれら一連の征服活動によって支配下に入った各地域に対して「管境巡守」をおこない、いくつかの石碑を建立して領土を確定していくが、中でも漢江下流の獲得は中国王朝への通行という点でも大きな意味を持ったといえる。564年になると北齊に、568年には陳に各々朝貢して南北双方の王朝とのパイプ作りをおこなっており、その後、隋の成立に至るまで、両王朝に遣使を続けることになる。6世紀半ばの朝鮮半島情勢は、高句麗が南方の広大な領土を失って権威が失墜する一方で、新羅が半島西海岸まで進出して強大化し、中国王朝との通交ルートも同時に獲得するというパワーバランスの変化が起こった時期であったと総括することができる。

さて6世紀後半に入ると、西部ユーラシアでも突厥を交えた外交戦が展開される。当初、突厥が共同戦線を形成していたサーサーン朝との関係は、まもなくシルクロードの利権をめぐる悪化し、シルジブロスはビザンツ帝国と連携し、サーサーン朝の東西から圧力を加える方針に転換する。突厥・ビザンツ間の使節往来は568年と576年に行われたが<sup>32)</sup>、おそらくこれが布石となって、572年、ビザンツ皇帝ユスティヌス二世（在位565～578年）は、既に地中海各地で帝国支配が崩壊しかかっている状況であったにもかかわらず、サーサーン朝との平和条約<sup>33)</sup>を破って同国との戦争に踏み切る。戦争は長期化し、これと連動して588年には西突厥軍（後述のように、突厥は583年に東西に分裂した）がアム川を渡ってサーサーン朝に侵攻した（第一次ペルシア・突厥戦争）。突厥の侵攻は、サーサーン朝の名将バフラーム＝チョービーンによって撃退されるが、その後も西突厥・サーサーン朝・ビザンツの3国は複雑な外交を展開し、バフラームの王位篡奪を経て、591年にビザンツの支援を受けたホスロー二世（在位590～628年）がバフラームを打倒することによって約20年にわたる戦乱は終結した。

この3国間の抗争の最大の原因は、中国から西アジア・地中海に至る東西貿易ルートの争奪であったが、この抗争の中で各種のバイパスルートが注目されるようになった。まず、先述のビザンツ帝国と突厥との間の使節往来は、北方のステップを経由して行われ、これも重要なルートとなったであろうが、他に、中央アジアからインド洋西部を経由してビザンツに至るルートであった。当時ビザンツはクリスマヤアイラといった紅海北部の港湾を拠点とし（これら港湾に入港する商船に課された税はビザンツの重要な財源となった）<sup>34)</sup>、エチオピアのキリスト教国であるアクスム王国を経由してインド洋ルートを確認しようとしていた。ビザンツの後援を受けたアクスム王国は525年に対岸のイエメンを占領したのもそういったビザンツの戦略に沿ったものと言えるが、ホスロー一世はこれに対して570年頃、艦隊を派遣してイエメンを占領し、サーサーン朝はインド洋の覇権を握ることに成功した。インド洋ルートは、中央アジアからインド西部を経由したり、東南アジアやインドを経由して海上輸送されたりした中国などの商品が、イランを経由せずにビザンツ

領内に入ることができるので、北方のステップルートと並んで中国とビザンツをつなぐ重要なバイパスルートとなったといえる。

このように、6世紀に入って、貿易ルートの確保をめぐる激しい抗争が引き起こされたが、後世への影響という意味で注意すべきは、両帝国の角逐がアラビア半島西部の都市の勃興を惹起したと思われる点である。家島彦一氏によれば、当時、インド洋ルートでビザンツに向かう場合、アラビア半島南端のハドラマウトやイエメンの諸港で商品が荷揚げされたが、これら諸港から紅海を北上してシリア・エジプトに向かう場合、季節風が現在のジッダ以北に及ばず、また難所が多いために航行上の難度が高く、一方、アラビア半島西岸を北上する陸上ルートも地形や気候上の問題があつて陸路通行に不便であつたため、それよりやや内陸部に入った高原ルートが重視されたという<sup>35)</sup>。このインド洋とシリア・エジプトつなぐ高原ルートの中心部に位置したのがヒジャーズ地方であり、さらにその中心都市として繁栄するようになったのがメッカであつた。5世紀末にクライシュ部族のクサイイという人物がメッカを征服し、周囲の神像をここに集中させて宗教的権威を高め、地域的な結合を達成した。先述の国際貿易をめぐる抗争とバイパスルートの強化というグローバルな変動とも相俟って、6世紀を通じてメッカは巡礼・交易の中心地として発展していく。

以上のことから、6世紀半ば以降、中央ユーラシア・シルクロードの主要部を掌握した突厥を軸にして、ユーラシアの主要国が同盟・戦争を通じて連動していき、緩やかながら一体化していったことを見てとることができる。そして、諸国の交渉において、中国の絹織物に象徴されるように貿易の比重がかなり高くなって来ていることにも注目すべきである。では6世紀前後、貿易や人の移動は前の時代に比して活発になったのであろうか。統計があるわけではないので、明確なことはわからないが、いくつかの例から類推してみよう。

吉水常雄氏は、サーサーン朝のガラス製品を分析し、世界各地から出土するこれらの製品が、サーサーン朝の王室工房において、あらかじめ決められたデザインに基づいて、厳しい品質管理の下に大量に生産されていたこと、サーサーン朝末期の7世紀に入るとこの大量生産体制が衰え、超高級品に特化してしまうことを指摘する。そして、王室工房によるガラス製品や染織品などがもたらす貿易収益がサーサーン朝の繁栄を支えていたとして、この国に貼られた“武力制圧型の国家”というレッテルをはがし、経済大国としてのサーサーン朝像を描いていくことを提唱する<sup>36)</sup>。いずれにせよ、大量生産体制が存続した6世紀までは、サーサーン朝の製品がシルクロードにおいて中国の絹織物に対抗する商品として流通していたことは確かであろう。

また、足利惇氏氏によると、サーサーン朝では官吏が王に提出する報告書の素材として羊皮紙が使用されていたが、ホスロー二世の時期に紙に切り替えられたという。当時、紙は中国の独占的輸出品であり、この時期の中国でもいまだ高価な品物であつた。それにもかかわらず、恒常的に使用される行政文書に紙を使用するようになったこと背景として、6世紀において紙の輸入量が増加したことを想定しないわけにはいかないであろう<sup>37)</sup>。

次に出土貨幣の状況を見てみよう、出土貨幣は貿易の状況を見る上で有益であるが、ここではサーサーン朝の通貨であつた銀貨の中国における出土状況を考える。孫莉氏によると、中国内で発見されたサーサーン朝銀貨として、2004年段階で2000枚弱が確認されているが、そのうち、ペーローズ一世（在位459～484年）のものが468枚、ホスロー二世のものが1328枚（ただし、大部分がアラブ＝サーサーン貨、つまりイスラーム時代の仿製銀貨）あつて、他の王の銀貨に比して突出している<sup>38)</sup>。出土地点の偏りなどもあり、必ずしも実際の流通状況を正確に示してはいな

いとは思われるが、それにしてもペーローズ一世貨の多さは注目に値する。桑山正進氏は、ペーローズ一世貨は中国内地で多く出土している点が特徴的であるとし、この王の時、エフタルとの戦いの中で捕虜となって莫大な身代金を支払っており、エフタル経由でペーローズ一世貨が東西交易路を流通したものであろうとする<sup>39)</sup>。ペーローズ一世貨は5世紀末にすでに北魏内に流入していたようであるが、出土した墓の造営年代（多くが6～7世紀初頭）を見ると、6世紀にも流入が続いたことが想定される。それは、巨視的に見て6世紀におけるシルクロードにおける貿易量の増大を意味していると言ってよいだろう。なお、韋正氏は、ビザンツ金貨は2013年段階において現在40数枚が中国国内で発見されているが、サーサーン朝銀貨に比して1世紀前後遅れた6世紀になって増加するとし、このタイムラグが生じたのは、ビザンツの中国に対する相対的な遠さのためと、ソグド人がペルシア人からシルクロードの支配権を奪うまではビザンツ金貨が中国に流入しにくかったためではないかとしている<sup>40)</sup>。ビザンツ金貨の流通は、6世紀のシルクロード貿易はさらに多様化したと言える。

一方、貿易活動の主役とも言えるソグド人の中国への移住も貿易の盛衰と関連するのではないかと思われる。森部豊氏によると、ソグド人の中国における活動は西晋時代から認められるが、定住は北魏以降、聚落の形成は北齊以降になるという<sup>41)</sup>。また、張慶捷氏は北朝期におけるソグド人など西方諸国の商人の中国への渡来が拡大した時期がいくつかあるとし、最初の波は北魏太武帝の北涼平定(439年)から孝文帝の洛陽遷都(494年)まで、第二の波は北魏神龜～正光年間(518～525年)、第三の波は北齊・北周初期、第四の波は隋初であるとし、ソグド人渡来の増減にはシルクロードと北朝内部の政情が影響を与えたとするが<sup>42)</sup>、戦乱が少なくなかった6世紀にも断続的に商人の渡来があったことは注目されてよいだろう。あるいは、突厥など遊牧帝国による安定的支配がシルクロード交通の安定をもたらしたのかもしれない。また、福島恵氏は、墓誌をはじめとする各種史料によってソグド人聚落のリーダーに与えられた官職である薩宝、及びゾロアスター教の主催者の称号である天主(祆主)の所在地を調査し、北魏時代において薩宝・天主が置かれた地域が、河西回廊の要衝である涼州や、長安と河西をつなぐ位置にある原州に限定されているのに対し、北周・隋時代になると薩宝・祆主が華北各地に置かれるようになったことを指摘する<sup>43)</sup>。こういったことから、ソグド人が6世紀になって中国への移住・定着が本格化したことがうかがえる。また、黄良瑩氏は北魏の東西分裂以降、“胡服”を表現した出土文物が増加し、中国でこの服飾が流行していたことを指摘している<sup>44)</sup>。氏によれば“胡服”には二つの源流があり、一つは鮮卑など北方民族の伝統服飾であるが、もう一つは西域胡服である。後者の“胡”とはソグド人などの西域出身者、あるいはその子孫を意味しているが、古墓の墓主は支配層に属する人々であるので、西域胡服の増加は、6世紀以降そういった階層の人々の周囲で活動するソグド人が増えていったことを意味するといえよう(ソグド人自身が墓主であることもある)。ただし、これらのソグド人がすべて商人であったわけではないので、このことを貿易の拡大と直接結びつけることは慎まねばならないが、ソグド人の中国流入が6世紀を通じて増大したことは確かであろう。

#### 4. 6世紀末からアッバース朝成立期までの素描

前節では、6世紀半ば、突厥の興起などの政治変動が相次いで起こり、ユーラシアがひとつにまとまり始めたことをいくつか例を挙げて論じた。本節では、この変動以降の展開をアッバース朝成立までを展望するが、長期にわたるのでいくつかの時期に区切って展望する。

#### 4-1 580年前後の状況

さて、570年前後には最盛期を迎えた突厥であったが、この頃、中国では新たな事態が進行していた。北周武帝は、陳との同盟を成立させて北齊に圧迫を加えていき、577年には北齊を滅ぼして華北統一を達成したのである。突厥のタトバル可汗は北齊皇族の高紹義を皇帝に擁立して北周の統一事業の妨害工作に出たので、武帝は突厥討伐を敢行するが、途上で死去する。武帝死後、楊堅が北周の実権を握り、楊堅は北周の皇女千金公主を突厥に嫁がせる。平田陽一郎氏は、この時、楊堅は千金公主が嫁いだのはタトバルではなく、東面可汗の摂図であったとし、これによって突厥勢力の分断を図り、またに高紹義の北周への引き渡しにも成功したと主張する<sup>45)</sup>。581年、楊堅は北周から禅譲を受けて隋王朝が成立するが（文帝；在位581～604年）、同じ頃、後継者争いを収束させて可汗として即位した摂図、すなわちイシュバラ可汗は、北周を滅ぼした隋に対する復讐に燃える千金公主の願いもあって隋への侵攻を開始する。これに対して文帝は、583年に突厥に対する大規模な遠征を行い、勝利を収める。平田氏によれば、この全面戦争の背景として北朝諸王朝が行ってきた突厥への“貢納”の停止があり、隋側もこれが突厥の怒りを買うことは予想していたが、突厥の政治的分裂や自然災害を見据えてこれを強行し、戦争に勝利したのだとする。

この敗北を機に突厥は東西分裂を余儀なくされ、585年には西突厥と契丹に挟撃されて弱体化した東突厥のイシュバラ可汗は隋王朝に服属し、漠南への移住を許可された。突厥はもともと、鉱産資源に恵まれたアルタイ山麓一帯から起こり、鍛鉄業によって柔然に仕えていた集団とされており、建国後の本拠も依然として漠北の聖地オテケン山一帯にあったが<sup>46)</sup>、ここに至って諸部落とともに長城付近に移住してくるようになった。これは突厥と中国の関係において重要な画期をなす出来事であると言える。また、文帝は589年に陳を滅ぼして中国統一を達成するが、統一の前に突厥を従属させた事実は隋の性格を考える上で注意すべきである。西魏・北周・隋と続く歴代長安政権は、南朝よりも突厥とより強く連動する国家であり、突厥側も漠南への移動という形でこれに応えたと考えることもできよう。

なお、北朝諸王朝と遊牧国家は婚姻を重ねてきたが、隋代に至って公主降嫁の意味が変化したとも言われている。藤野月子氏は、歴代の「和蕃公主」降嫁の事例を分析し、北魏成立当初の婚姻政策は周辺諸国と女性を相互に交換する形の「政略結婚」的性格を持っていたが、北魏の華北統一以後は、周辺諸国に対する優位性や中華思想が形成され、公主降嫁が「恩寵」的性格を持つようになり、北魏東西分裂期には一時的に公主降嫁は「政略結婚」へと回帰するが、隋になると再び「恩寵」に変化し、これが唐代につながっていったとする<sup>47)</sup>。公主降嫁の“恩寵”化も、隋の優位性を背景にしているということができよう。

#### 4-2 620年前後の状況

さて、前節で述べたように、東部ユーラシアでは6世紀末には中国のみならず、東部ユーラシア全体のパワーバランスが一挙に変化した。南北朝の並立状況によって周辺諸国に比較的自由な外交戦略をとる余地が与えられた時代から、隋王朝による突厥の打倒と陳の征服が達成されたいわば一極集中型時代への変化が、朝鮮半島諸国や倭国に与えた影響は計り知れない<sup>48)</sup>。特に煬帝（在位604～618年）がおこなった高句麗遠征によって、中国東方の諸国は細心の注意を払って生存戦略を選択していくことを要求されることになった。もともと高句麗遠征は失敗に終わって隋の国内は群雄割拠の状態となったので、唐による中国統一までの期間、周辺諸国はモラトリアム期間を得たと言えよう。そういった中で、漠南移住によって隋の衛星国的な位置に甘んじていた東突厥は、

中国への近さを逆手にとって、華北の群雄を従属させるようになる。618年に成立した唐王朝も例外ではなかったとされる。さらに東突厥は、南朝梁王朝の一族であり、煬帝の皇后になっていた蕭氏とその孫の楊正道（楊政道）を引き取り、620年に楊正道を定襄において隋王として擁立し、亡命政権を作って唐王朝やその他の群雄に対して睨みをきかせた<sup>49)</sup>。こうして、突厥は中国に対して優位に立てるばかりか、積極的な介入さえ可能な状況が出現したが、それは中国と内陸世界が密接に結びついていたことも意味している。

こういった隋末唐初の混乱と軌を一にするように、西部ユーラシアも激動の時期を迎えている。602年にサーサーン朝のホスロー二世がビザンツ領内に攻め入ってから、両国の間には長い戦いが続いていたが、この戦争は、当初サーサーン朝側が優勢であり、611年にはアンティオキアなどのシリア諸都市が、614年にはエルサレムが、615年にはアナトリア西端のカルケドンが、617年からの遠征ではアレキサンドリアなどのエジプトを征服した。619年には西突厥がビザンツを助ける形でサーサーン朝に攻め入ったが、これも撃退されてしまっている（第二次ペルシア・突厥戦争）。このような戦況であったので、ビザンツ皇帝ヘラクレイオス一世（在位610～641年）は、一時はカルタゴへの遷都を考えるほど追い詰められた。しかし、彼は622年頃から体制を整えて本格的な反撃を開始する。ヘラクレイオス一世の反撃の過程で、625年には西突厥との同盟を改めて成立させ、627年には西突厥のトンヤブク可汗（在位618年頃～628年）が、当時サーサーン朝の支配下にあったグルジアに攻め込む（第三次ペルシア・突厥戦争）。こうして、ビザンツとサーサーン朝の間で始まった戦争は、ビザンツ・西突厥・ハザール同盟対サーサーン朝・アヴァール同盟という巨大な国際戦争に発展していった。この結果、ビザンツ軍はついに勝利し、628年にはホスロー二世は殺され、サーサーン朝は混乱状態に陥る。ビザンツが窮地を脱して勝利を収めた理由は多々あるであろうが、トンヤブクが本拠地である中央アジアから、はるばるトランスコーカサスにまで進出してサーサーン朝に圧力をかけたことの意味は大きいだろう。東突厥と同様、西突厥はこの時点では依然として中央ユーラシアの覇者であったと言える。

#### 4-3 630～650年頃の状況

630年以降になって世界各地でさらに大きな変化が起こる。唐王朝は秦王李世民（後の太宗；在位626～649年）らの主導のもとに着々と中国統一事業を進め、東突厥に対する従属から抜け出していった。628年に朔方に拠る梁師都を平定して中国本土の統合を達成した唐は、すぐさま北方・西方に対する拡張に取りかかり、630年に東突厥を打倒して漠南を制圧し、同時に前述の楊正道らの亡命政権も消滅させ、640年に高昌国を征服して西域への進出を本格化する。645年の高句麗遠征はシルタルドゥシュの介入によって両面作戦を強いられたために不調であったが、648年には、シルタルドゥシュなど鉄勒諸部を破って漠北をも制圧するに至った。唐がこのような大征服活動を行った原因は様々であろうが、巨視的に言えば、前述の6世紀後半以来の華北諸王朝（北朝・隋・唐）と内陸世界の連動が背景にあり、突厥にかわる内陸の支配者として唐が出現するのは自然な流れであったということはできよう。

640年代には、朝鮮半島や倭国でも政変が相継いだ。まず、641年に百済で義慈王（在位641～660年）が即位すると、翌年には義慈王は新羅の大耶城など40余城を攻め取るなどの攻勢に出たが、結果的にはこれが朝鮮半島統一戦争の引き金になった。この頃、百済王子の翹岐が倭国に来ているが、彼は後に百済復興軍が擁立した豊璋であるとの説が有力であり、さらには、彼の倭国への渡来には義慈王をめぐる政変が背景としてあった可能性も指摘されている<sup>50)</sup>。さて、642年には高

高句麗では淵蓋蘇文がクーデターを起こし、栄留王を殺害して独裁権力を握った。彼が推し進めた国家体制の強化は、645年から始まった唐の侵攻を撃退する原動力となったとされる。また、この642年は、倭国において蘇我入鹿が国政を掌握した年でもある。そして、3年後の645年には乙巳の変が起こって蘇我氏が排除され、周知のようにその後様々な改革が行われる。このように、640年代に中国東方の諸国では連鎖反応のように政変・中央集権化が続いたが、これは唐の強大化への対応とみることができる。その中で、外交面では高句麗と百済（後に倭国も参入）が同盟して新興勢力たる新羅を圧迫し、唐が新羅を支援してこれに介入するという構図が生まれた。

一方、西方では薄氷の勝利を取めたばかりのビザンツ帝国のヘラクレイオス一世が、アラブの台頭という新局面を迎えていた。前述のように、6世紀、ビザンツとサーサーン朝の間の貿易ルートをめぐる抗争の副産物として、アラビア半島の西部ではメッカなどの通商都市が勃興していた。周知のように、610年頃、ムハンマドはメッカの郊外のヒラー山で最初の啓示を受けてから、622年のヤスリブへの移住、630年のメッカ占領と続く過程で、イスラーム共同体が形成され、アラビア半島の諸部族がムハンマドのもとに結集していった。ムハンマドの活動は、先述のヘラクレイオス一世とホスロー二世の戦いと同時進行しているが、632年にムハンマドが死去し、若干の混乱の後に、カリフとなったアブー＝バクル（在位632～634年）の号令のもとにビザンツやサーサーン朝に対する一大征服活動が展開されることになる<sup>51)</sup>。この後、イスラーム軍は、636年にシリアを制圧し、641年にはアレキサンドリアを開城させ、651年にサーサーン朝を滅ぼし、唐の対外進出とほぼ同時進行で大帝国の建設を進めていく。

#### 4-4 660～680年頃の状況

唐王朝は、657年に西突厥を滅ぼし、661年にはパミール以西の16国に多くの羈縻府・州・県を設置し、663年頃には安北都護府が漠北を、単于都護府が漠南を、安西都護府が西域（パミール以西を含む）を管轄する体制を作り上げた。一方、東方では660年に唐軍・新羅連合軍は百済を滅ぼし、663年には豊璋を擁立した倭国の救援軍を含む百済復興軍を撃破する一方、淵蓋蘇文死後の高句麗の内部分裂を利用してこれを滅ぼすに至る。朝鮮半島の作戦は、内陸における一連の軍事活動と内陸世界の支配確立の過程とほぼ重なっており、この頃は唐に東西で両面作戦を遂行できる余裕があったことを示している。

しかし、唐の両面作戦は失敗に終わる。高句麗滅亡前後から、唐と新羅の関係は悪化していき、旧百済領の帰属問題や安勝を擁立した高句麗遺民集団の処遇などを契機にして670年から全面戦争に突入するが、その頃、唐は吐蕃の強大化という新たな西方問題にも悩まされるようになっていた。吐蕃は663年頃から吐谷渾を滅ぼし、シルクロードの掌握を目指して唐と衝突したので、670年、平壤に駐屯していた薛仁貴が対吐蕃戦に投入されるが、大非川の戦いで敗れてしまう。古畑徹氏は、678年になって唐は新羅への介入政策を中止したと考えるが、その背景として唐王朝が朝鮮半島政策よりも吐蕃対策に関心が移ったことを挙げる<sup>52)</sup>。678年といえば、青海において唐が再び吐蕃に破れた年であるが、この時、決死隊を率いて吐蕃の攻撃を挫いて唐軍を壊滅から救った人物が、百済滅亡後に唐に降った黒齒常之であったのは歴史の皮肉と言うべきであろう。いずれにせよ、盧泰敦氏が言うように、640年代から676年まで続いた朝鮮半島を舞台とする一連の戦争はパミール高原以東の大多数の国と種族が、直接・間接に関係した国際戦争であったとすべきであり<sup>53)</sup>、白村江の戦いはもちろん、あるいは壬申の乱も東部ユーラシア全体の歴史的な枠組の中に位置づけられなければならないであろう。

きて、西方のイスラーム共同体では、656年にアリーがカリフとなってから661年にムアーウィアがカリフとしての権力を確立するまで、第一次内乱と称される混乱期が続く。さらに683年から692年の間も第二次内乱が起こっており、ウマイヤ朝もこの時期には大規模な対外攻勢に出られなかった。中央アジアではアム川を越えてソグディアナに進出する力はなく<sup>54)</sup>、地中海方面でもコンスタンティノープル攻略に失敗した。ビザンツ帝国もブルガール人のバルカン半島への侵攻とこの地での第一次ブルガリア帝国の建国を防ぐことができなかった。井上浩一氏は、この時期、戦乱が続いたビザンツでは、各地の軍団を率いていた司令官が自力で軍管区（テマ）を維持する状態が続いていたが、8世紀に入って皇帝権力が半独立政権となっていたテマを行政組織として編成し直していくとし、これは「東ローマ帝国」が滅び、「ビザンツ帝国」が新たに生まれる過程でもあったとする<sup>55)</sup>。このように考えると、7世紀後半の西部ユーラシアは、イスラームの勃興にともなう戦乱に疲れ果ててある程度の均衡を保つようになったが、その過程でイスラーム化したか否かにかかわらず、各政権において政治・社会・宗教的な大転換を経験したといえることができる。

なお、7世紀半ばの国際社会を表現しているものとして、先述のアフラシアブ壁画が挙げられる。ここには、唐やインドをはじめとする世界各国の使節が描かれているが、注目されるのは、西壁右側には突厥人や吐蕃人らしき人物と並んで、鳥羽型の冠をかぶり、環頭太刀を佩用した、朝鮮半島からの使節とおぼしき人物が描かれていることである。彼らが高句麗人であるのか、それとも新羅人であるのかについては議論が分かれるが<sup>56)</sup>、朝鮮諸国の外交の射程が内陸世界に達していたことは間違いない。前述のように、壁画の作成年代が660～663年であるとする、サーサーン朝滅亡（651年）、西突厥滅亡（657年）、百濟滅亡（660年）、イスラーム共同体における第一次内乱（656～661年）、サーサーン朝王子ペーローズの唐に対する救援要請（661年）という緊迫した中で、ワルフマーン王は自国にユーラシアの東西にまたがる多くの国々の使節が集う場を演出し、北上するイスラーム勢力を牽制しようとしたのかもしれない。

#### 4-5 8世紀前半、アッバース朝成立前後までの状況

唐の覇権の衰退は、696年の素羅汗山の戦いで吐蕃軍に大敗することで明白になったが、北方でも同様のことが起こっていた。682年に突厥が再び独立すると（第二可汗国）、これを契機に、唐は685年には安北都護府を漠北から河西地区に撤退させ、686年に漠南の单于都護府を廃止し、モンゴル高原から全面的に撤退することになる。さらに、契丹人李尽忠の周（690～705年の間は周王朝）に対する反乱にともなって、靺鞨人の大祚榮らの一派も独立を試み、698年に震国を建国するに至る。中国王朝は大祚榮の独立を認めざるをえず、713年には、唐が彼を渤海郡王として冊封することになる。菅沼愛語氏は、「7世紀後半の唐・吐蕃戦争」、「新羅の朝鮮半島統一」、「突厥の反乱と復興」、「契丹の反乱」、「渤海の建国」には一定の関連性があるとし、度重なる吐蕃に対する敗退が周辺諸民族の自立を招き、唐は十分な対策がとれずに自立の容認を余儀なくされたものの、8世紀に入ると周辺諸国の独立を認めつつ、それらを勢力下に引き入れる方向へと転換していったと展望する<sup>57)</sup>。

東方諸国を見ると、倭国は669年の第7次遣唐使以来、しばらく唐への遣使を控えており、新羅も対唐戦争中の675年以来、中国への遣使が少なくなっていたが、これとは対照的に、対唐戦争に専念したい新羅が倭国に接近したこともあって、倭・新羅間の使節の往来は頻繁であった<sup>58)</sup>。周知のように天武・持統朝（673～697年）には一連の制度整備がなされたが、遣唐使が派遣されていないこの時期に服飾や儀礼などの唐風化が進展したのは注目すべきことである。そのような

制度改変を可能にした背景の一つとして、倭国との交流を深めた新羅の影響を想定する見解が有力である<sup>59)</sup>。このように7世紀最後の30年間、唐と距離を取っていた両国に変化が現れるのが8世紀に入ったあたりである。702年に倭国は約30年ぶりに中国への遣使をおこない、周王朝に対して「日本」への国号変更を報告し、新羅も703年以降は頻繁に中国への遣使をおこなうようになる。690年代の動乱の後、渤海が唐によって承認されたことは前述の通りであり、こうして、8世紀はじめになると、中国（周・唐）と東方諸国の関係は次第に緊密になっていった。

内陸世界の様子はどうかであろうか。菅沼愛語氏は、8世紀前半の唐の外交は突厥と吐蕃の両大国と同時に戦う両面作戦を避ける方針をとったとし、710年に金城公主を吐蕃に嫁がせる一方で、突厥に対する討伐を計画した例（ただし、遠征は中止された）、727年には突厥と和睦する一方、吐蕃を集中攻撃した例、730～733年の間、吐蕃と和平交渉をおこなう一方で、突厥・契丹・渤海の三国同盟に対抗した例を挙げている<sup>60)</sup>。このような政策によって、玄宗時代の唐王朝は、周辺諸国との間では局地戦は絶えなかったものの、安史の乱勃発に至るまでは破滅的な戦争に引きずり込まれることはなかった。なお、突厥第二可汗国は独立間もない686～687年頃に鉄勒諸部を平定して漠北に本拠を移動させ、6世紀の第一可汗国建国時に本拠が置かれたオテケン山を奪回した<sup>61)</sup>。この移動は6世紀末に漠南に本拠を移して以来、中国と連動してきた突厥が中国との間に距離を置く契機となり、唐への侵攻を繰り返したカプガン可汗（在位691～716年）の死を境に、唐と突厥の抗争は次第に沈静化していく<sup>62)</sup>。第一可汗国期の突厥碑文においてはソグド語・ソグド文字が用いられたのに対し、第二可汗国期の碑文では突厥語・突厥文字が用いられており、碑文の内容についても中国を意識したナショナリズムが表現されているとされ<sup>63)</sup>、また、ビルゲ可汗（在位716～734年）が国内に城郭を築き、仏寺・道観を建立しようとした際に、実力者トニユククが、突厥が中国文明に同化してしまう危険性を理由にこれに反対したというエピソードが残されているが、こういったことは突厥支配層が民族的自覚を強めつつも、外界に対する積極的なコミットを控え、内向的な国家を志向するようになっていったことを示しており、これは唐の世界戦略にとってはどちらかといえば好都合であったであろう。

一方、内乱を克服したウマイヤ朝は東西で征服活動を再開する、一般的に知られているのは711年にイベリア半島に上陸して西ゴート王国を滅ぼしたことであろうが、本稿で問題としている国際政治や国際貿易にとってより重要なのは、ホラーサーン総督に任命されたクタイバ＝イブン＝ムスリムが、705年からシルクロードの要衝であるソグディアナ諸都市の征服に着手し、ブハラ、サマルカンド、シャーシュなどがその軍門に降っていったことである。もっとも、715年にクタイバがウマイヤ朝の新カリフのスライマーン（在位715～717年）に叛旗を掲げ、まもなく部下に殺されてしまったために、征服活動はそれ以上進展しなかった。その後、ソグディアナ諸都市やその周辺諸国はたびたびウマイヤ朝に対して自立を試み、そのたびに当時急速に勢力を伸ばしていた西突厥の一派トウルギシュの君主スールク（在位716?～738年）が介入したため、イスラーム勢力のソグディアナ支配は進展しないまま時が流れた。

ところが、737年頃にイスラーム軍がハリースタンでスールクを破り、翌年スールクが殺されてトウルギシュが分裂すると、状況が変わり始めた。それまでトウルギシュを通じてイスラームの東進に対抗していた唐が直接この方面に進出し、両帝国が直接対峙する局面を迎えたのである。折しもシルクロードへの進出をねらう吐蕃がパミール方面諸国を従属させており、唐は747年に高句麗系の軍人、高仙芝を派遣し、吐蕃と通婚関係にあった小勃律を討って、吐蕃の北進を食い止めることに成功した<sup>64)</sup>。これによって唐の中央アジア諸国における覇権が再び確立されたが、まさ

にこの年、ウマイヤ朝ではホラーサーンを起点として、アッバース朝革命が始まった。アッバース家によってホラーサーンに派遣された運動員アブー＝ムスリムは、ウマイヤ朝に対する不満を持つ人々を糾合して叛旗を翻し、革命軍は当地の広範な人々を巻き込んでウマイヤ朝中枢部に進軍し、750年にはウマイヤ朝は滅亡してアッバース朝が成立するに至る。このような動乱の最中にも、革命の立役者であるアブー＝ムスリムはホラーサーンのメルヴに留まって中央アジアにおける不測の事態に備えていた。実際、750年にはブハラで反乱が起こり、ズィヤード＝イブン＝サーリフが派遣されてこれを鎮圧している。このような緊迫した状況の中、唐側では高仙芝がシャーシュを占領して略奪をおこない、その王を長安に連行するという事件があった。前嶋信次氏はこの事件の背景について、スールクの死後内紛が続いていたトウルギシュの分裂に乗じてシャーシュが勢力を伸ばし、当時西域への介入政策を進めていた唐と対立する結果になってしまい、これが高仙芝のシャーシュ討伐につながったのではないかとしている<sup>65)</sup>。さて、シャーシュ略奪の報を聞いたソグディアナ諸都市はアッバース朝に救いを求め、アッバース朝側はこれに応じて前述のズィヤードを派遣した。ズィヤードはタラスまで北上して高仙芝率いる唐軍と戦い、これを破った。

このタラスの戦いは有名だが、前嶋氏の言うように、両国はお互いを仇敵と見做していたわけではなく、この戦いは偶発的なものであったと言うべきであろう<sup>66)</sup>。なにより、アッバース朝からすればシルクロード貿易の途絶による不利益は計り知れず、全面戦争など思いもよらないことであったはずである。タラスの戦いをことさらに重視する歴史観の根底には“文化や価値観を異にする超大国同士は激しい覇権争いをするはずである”という予断があるように思われるが、この前後の世界情勢をつぶさに見ていけば、唐とイスラームの両帝国が基本的には共存共栄を志向していることがわかる。仮にこのままにらみ合いが続いていけば、唐と吐蕃の例のように、いずれ両国は会盟を行って勢力範囲を確定して決着したであろう。しかし、実際には755年に始まった安史の乱によって唐の本土は内乱状態に陥り、唐は西域経営から手を引かざるを得なくなってしまう。アッバース朝は東方からの圧力をそれほど感じずにすむようになり、彼らにとっての黄金時代が始まる。

#### 4-6 アッバース朝ネットワークとユーラシア世界の一体化について

アッバース朝の第2代カリフ、マンスール（在位754～775年）は、首都をハーシミーヤからバグダードに移転することとして、762年から建設を開始した（766年完成）。帝国の中枢がウマイヤ朝時代におけるシリアのダマスカスから、イラクのバグダードに移ったことになるが、これは帝国の重心が東方に移動したことを意味する。東方遷移の背景として、革命運動の基盤がイランの一部であるホラーサーンであり、かつ、バグダードを含むイラクが歴史的にイランとが分かちがたく結びついていたことが挙げられよう<sup>67)</sup>。さらに、そういった政治的な理由に加えて重要なのは経済的要因であると思われる。これよりやや後の歴史家・ウラマーであるタバリーによれば、マンスールはバグダード建設にあたって「……それに加えて、ここはティグリス河があり、我々をはるか中国までも結びつけることができるし、メソポタミア・アルメニア、その他の地域の農産物と同様、豊かな海産物をもたらしてくれる。さらにユーフラテス河は、ティグリス河との間を結ぶ運河によって、シリア・アル＝ラッカ、及びその隣接地からいろいろの特産物を運んでくる。」と語ったという<sup>68)</sup>。ここでは、バグダードが西アジア諸地域のみならず、遠く中国と結びついていることを地理上の長所として挙げられていることに注目したい。中国へのルートは内陸のシルクロード経由でなく、バスラ経由の海上ルートのことが念頭に置かれている可能性もあるが、いずれにせよ、マン

スールの言葉は、安史の乱後の“衰退”を経ても、アッバース朝が構想していた商業ネットワークにおいて、唐との貿易が重要な位置を占め続けたことを示しているといえよう。

ところで、かつてアンリ＝ピレンヌ氏は、古代世界の共通の世界であった地中海の制海権がウマイヤ朝に奪われ、西欧の人々が自由に往来できなくなった7世紀に古代世界は終わり、これ以降、ヨーロッパの重心はアルプスの北に広がる世界に移動したと主張した。この有名なテーゼにおいてイスラーム勢力は交易における遮断者としてネガティブにとらえられており<sup>69)</sup>、その後、様々な歴史家が批判を行った結果、イスラームの勃興を世界史の中で積極的に評価する見解が有力になっている。たとえば、佐藤彰一氏は、カール大帝の時代は、アッバース朝が作り上げた巨大な経済センターが、帝国の内外を含めた膨大な量の経済的果実を流通させ、これをコントロールした時期と重なり、フランク王国の幸運は、巨大な経済力を持つアッバース朝の全盛期と重なったことである、と結論づけ、また「周縁化」あるいは「半周縁」のポジションに落ちた西ヨーロッパが「中心」化へのステップアップを開始したのが8世紀後半であり、その原因として、バグダードやサーマッラー（836～892年の間、サーマッラーは首都であった）という2大都市の出現と、これらの都市がおこなった東南アジア・中国・東アフリカなどの取引によって、ヨーロッパにもたらされた経済的波及効果を挙げる<sup>70)</sup>。また、大月康弘氏は、ピレンヌ＝テーゼに対する批判として、「ヨーロッパ中世世界」の成立は、ヨーロッパキリスト教世界内での政治的関係の変化であることを強調し、「ヨーロッパ中世世界」の成立の原因として外的要因よりも内的要因を重視すべきことを主張するが、その中で、7世紀まではビザンツ皇帝に対して従属的な立場に置かれていたローマ教皇庁が8世紀を通じて次第に独立性を強め、また、731年から787年までの間に、ローマ教皇庁がフランク王国との関係により重点を置くように政策を転換したこと、それにもかかわらず、ビザンツとローマの間の伝統的関係はその後もしばらく存続し、またビザンツ側がフランクにとって無視できない権威であり、ビザンツ側もフランクに対して様々な働きかけをせざるを得なかったことを指摘する<sup>71)</sup>。こういったことから、フランク王国もまたローマやコンスタンティノープルを通じてバグダードを中心とする世界的なネットワークと結びついていった様子が浮かび上がるように思われる。

最後に、近年の東アジア論について簡単な展望も行っておきたい。周知のように、東アジア世界論については膨大な研究蓄積があるが、近年では、金子修一氏が研究史を整理し、あくまで日本と中国・朝鮮との間の歴史的関係を重視し続けた西嶋定生氏の冊封体制論と、内陸世界を含めたより広い範囲を想定しつつ、「冊封」の役割を相対化して“羈縻”の語を中国の異民族支配のキーワードとした堀敏一氏の東アジア論の対比を軸にして論じている<sup>72)</sup>。近年の研究動向は、堀氏の見解により近いと言える。川本芳昭氏は、北朝の拡大と隋唐帝国の出現は、「南朝の側から見ると、それは南朝を中心とした世界システムの崩壊を意味していた」とし、また、中国周辺まで視野を広げ、「南朝と連動、あるいはその傘下にあった柔然、吐谷渾、雲南爨蛮（雲南にあった南蛮勢力）、高句麗、百済などの諸勢力は唐代にかけて相継いで滅亡」するが、「それら諸勢力の背後にあって勢力を蓄積してきていた突厥、吐蕃（チベットで興起）、南詔（雲南で興起）、渤海、新羅、日本などが興隆してくる」とする<sup>73)</sup>。ここでは内陸から日本まで多様な民族を巻き込む形で、南朝的な天下観を支えたシステムが北朝隋唐のそれに移行していくという歴史観が提唱されている。また、今まで自明のこととされてきた東アジア世界の枠組にも疑問が投げかけられている。たとえば、李成市氏は東アジア世界論そのものが、戦後日本の置かれていた国際情勢と向き合うことによって生まれてきたこと、つまり、東アジア世界論がいわば日本という一人称から構想された歴史

の枠組であったことを指摘し、この枠組を克服して新たな東アジア世界論を追究すべきことを提唱する<sup>74)</sup>。また、廣瀬憲雄氏は東アジア世界という枠組から東部ユーラシアという枠組への転換を提唱し、東部ユーラシア論は、空間的には中国と西方・北方諸勢力との関係を含め、時間的には唐代後半～五代両宋/遼金時代をも視野に入れるべきこと、また冊封体制に代表される中国王朝と周辺勢力の君臣関係に加えて、多様な非君臣関係の存在を想定すべき点を強調する<sup>75)</sup>。このように、“日本列島から見た中国王朝の国際関係”を解明することに力点を置いた東アジア論を乗り越え、日本と中国をともに相対化しつつ、東部ユーラシアというより大きな枠組みで歴史を考える研究動向は、さらに進んでアフロ＝ユーラシア全体への歴史観に発展する可能性を秘めていると言えよう。

## 5. おわりに

以上、6世紀から8世紀にかけてのアフロ＝ユーラシアにおいて、まず、突厥の勃興前後において主要国が戦争や外交を通じて連動を始め、東は朝鮮半島から西は地中海まで東西にまたがる“国際社会”が姿を現し、突厥の衰亡と入れ替わるようにして唐王朝やイスラーム勢力の超大国化によってさらに“国際社会”が活性化していき、バグダードを中心とするアフロ＝ユーラシアにまたがるネットワークが形成されるまでの過程を、筆者なりにまとめてみた。つまり、アッバース朝による“世界の一体化”があったとしても、その成果はバグダードの建設に先立つ2世紀にわたる多くの国の盛衰の歴史と試行錯誤の上に築かれたものであったことを理解すべきであるといえる。こうして生まれた8世紀の“世界の一体化”は、13世紀におけるモンゴル帝国を核とする一体化や、16世紀やそれ以降のグローバリゼーションとも違う特徴を持っているように思われる。各時代の“一体化”を比較し、世界史叙述の大きな枠組を作ったり、あるいは学習者に考えさせたりすることは有益な試みになるであろう。

また、この時代を通観して、気がつくことの一つとして、当時の各国支配層の異文化・異文明に対する寛容性や許容能力の高さである。7世紀以降のイスラームの拡大にともなって過酷な改宗の強制があまりなかったことはよく知られており、また、様々な既存の宗教共同体がイスラームによる征服以降もズィンミーとして扱われて存続し、多くの地域においてムスリムが多数派になるまでには長い時間を要したことも指摘されている<sup>76)</sup>。また、ハディースの中の「知識を求めよ、中国であろうとも」という著名なムハンマドの言葉も、遠方の文明に対する許容性を示すものといえる。その中国においては、『旧唐書』の西戎伝・大食国条に載せられたエピソードが目を引く。それは、713年に長安に至った大食の使節が玄宗に対して拝礼をおこなわなかったことを御史が咎めると、中書令張説が彼らは俗を殊にする国であり、義を慕ってはるばるやってきたのであるから罰するべきではないとし、玄宗もこれを許した（ただし、後の時代になってしばしば問題にされたので、イスラーム側も拝礼を余儀なくされた）というものである。ここに言う大食の使節とは、当時ソグディアナ諸都市を攻略しつつあったホラーサーン総督クタイバ＝イブン＝ムスリムが送った使節であるとされる<sup>77)</sup>。ソグディアナをめぐる両国の間が緊迫していたにもかかわらず、この時期の唐の朝廷には、現実の外交・戦争はひとまずにおいて異文化を許容し、共存していこうとする姿勢があったことがわかる。また、唐の周辺国家が対唐戦争を経ても平然と使節や留学生を長安や洛陽に送り続ける例が多々見受けられ、それらの例は当時の唐を中心とする東部ユーラシア世界において、“戦争と平和”をめぐるなんらかの暗黙のルールが機能していたことを察せしめるもの

である。さらに想像をたくましくすれば、他者に対する接し方に関して、この時期のアフロ＝ユーラシアを覆う共通の精神があり、それは突厥の中央ユーラシア制覇から始まる世界帝国の形成の過程において生まれたのかもしれない。もし、そのような精神が存在していたとして、我々はそれをいつ失ってしまったのであろうか。

#### 注

- 1) 羽田正『新しい世界史へ ―地球市民のための構想―』(岩波書店、2011年) 参照。
- 2) 李成市「古代東アジア論再考」(『歴史評論』696、2008年) 参照。
- 3) ジャネット＝L＝アブ＝ルゴド(佐藤次高等訳)『ヨーロッパ覇権以前 ―もうひとつの世界システム―』(岩波書店、2001年) 参照。
- 4) 杉山正明「ユーラシア世界史から人類史へ」(紀平英作編『グローバル化時代の人文学 ―対話と寛容の知を求めて― 上 連鎖する地域と文化』、京都大学学術出版会、2007年) 参照。
- 5) 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業―国際商業ネットワークの変動を中心に―』(岩波書店、1991年) 参照。
- 6) 宮崎正勝『イスラム・ネットワーク ―アッバース朝が繋げた世界―』(講談社、1994年) 参照。
- 7) 佐藤彰一『世界史リブレット人 29 カール大帝 ―ヨーロッパの父―』(山川出版社、2013年) 参照。
- 8) 氏族詳定については、宮崎市定『九品官人法の研究』第2編第5章「北朝の官制と選挙制度」(同朋舎、1956年) に概略が載せられている。
- 9) 西晋から梁に至るまでの礼制改変の概要については、拙稿「泰始礼制から天監礼制へ」(『唐代史研究』8、2005年) 参照。
- 10) 508年の所謂“天監7年の改革”の内容と梁の武帝の意図については、越智重明『魏晋南朝の貴族制』第7章「梁陳政権と梁陳貴族制」(研文出版、1982年) 参照。
- 11) 戸川貴行「劉宋孝武帝の礼制改革について ―建康中心の天下観との関連からみた―」(『九州大学東洋史論集』36、2008年)、及び同「東晋南朝における建康の中心化と国家儀礼の整備について」(『七隈史学』13、2011年) 参照。
- 12) 450年の北魏太武帝による南朝宋への攻撃から始まって470年頃に至るまで、北魏は南朝の領土を奪い、この結果南朝は国際的にも政治的権威を失墜したが、これが高句麗の百濟への侵攻や倭の五王の宋への遣使の終焉と関連ありとする見解がある。川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』第5篇第1章「倭の五王による劉宋遣使の開始とその終焉」(汲古書院、1998年) 参照。
- 13) 南朝の外交政策については、坂本義種『古代東アジアの日本と朝鮮』付編第6「倭国王の国際的地位 ―五世紀の南朝を中心として―」(吉川弘文館、1978年) 参照。
- 14) 趙燦鵬「南朝梁元帝《職貢図》題記佚文の新発見」(『文史』2011-1) 参照。
- 15) 榎一雄「職貢図の起源」(『榎一雄著作集』第7巻、汲古書院、1994年) 参照。
- 16) 鈴木靖民「東アジア世界史と東部ユーラシア世界史:梁の国際関係・国際秩序・国際意識を中心に」(『専修大学社会知性開発研究センター 東アジア世界史研究センター年報』6、2012年) 参照。
- 17) 張爽「5-6世紀欧亜大陸的政治連係与絲綢貿易 ―以嚙嚙帝国為中心―」(『社会科学戦線』2013-4) 参照。
- 18) フランツ＝グルネ「サマルカンド出土「使節の壁画」に関する最新の研究」(文化遺産国際協力センター編『シルクロードの壁画 東西文化の交流を探る』、言叢社、2007年) 参照。
- 19) 三崎良章「北魏の対外政策と高句麗」(『朝鮮学報』102、1982年) 参照。
- 20) 緩衝地帯としての「蛮酋」の政治的機能については、陳金鳳『魏晋南北朝中間地帯研究』第8章「南北朝時期的蛮族与中間地帯的争奪」(天津古籍出版社、2005年) 参照。
- 21) 川本芳昭注12前掲書第1篇第1章「五胡十六国・北朝時代における華夷観の変遷」(汲古書院、1998年) 参照。

- 22) 川本芳昭「北朝国家論」(『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』、岩波書店、1999年) 参照。
- 23) 突厥台頭の過程については、護雅夫『古代遊牧帝国』(中央公論社、1976年) 参照。
- 24) 侯景の乱によって梁王朝が崩壊した原因は、侯景の反乱という表面上の政治変動のみにあるのではなく、地方における貨幣経済の進展は失業の商業人口・流亡農民の増加、土豪将帥層といった梁末社会の様々な問題が背景として存在する。川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』第3部第3章「貨幣経済の進展と侯景の乱」(岩波書店、1982年) 参照。
- 25) 西魏北周政権の四川方面への拡大過程については、前島佳孝『西魏北周政権史の研究』(汲古書院、2013年) の第2部「対梁関係の展開と四川獲得」の各章参照。
- 26) 和田博徳「吐谷渾と南北両朝との関係について」(『史学』25-2、1951年) 参照。
- 27) 川本芳昭注12前掲書第1篇第1章参照。
- 28) 菅沼愛語「西魏・北周の対外政策と中国再統一へのプロセス ―東部ユーラシア分裂時代末期の外交関係―」(『史窓』70、2013年) 参照。
- 29) 平田陽一郎「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政権」(『東洋学報』86-2、2004年) 参照。
- 30) 6世紀半ばにおける朝鮮三国抗争の過程は、李丙燾(金思燁訳)『韓国古代史』下、第7編「三国の発展と鼎立 ―三～六世紀の三国の動き―」(六興出版、1979年) が詳細に記述している。
- 31) 木村誠「朝鮮三国の興亡」(荒野泰典等編『日本の対外関係 1 東アジア世界の成立』吉川弘文館、2010年) 参照。
- 32) ビザンツ帝国の2回の突厥への遣使、つまり568年のゼマルコスと576年のヴァレンティニアノスの旅行に関する史料の詳細については、内藤みどり『西突厥史の研究』付論II「東ローマと突厥との交渉に関する史料 ―Menandri Protectoris Fragmenta 訳註―」(早稲田大学出版部、1988年) 参照。
- 33) この条約は562年にユスティニアヌス一世とホスロー一世の間で締結され、50年間の両国の不戦を謳ったものであった。この頃のビザンツ帝国とサーサーン朝の概略については、米田治泰「ビザンツと西アジア文明」(山田康夫編『東西文明の交流 2 ペルシアと唐』、平凡社、1971年) 参照。
- 34) 尚樹啓太郎『ビザンツ帝国史』第1部第3章「ローマ帝国復興の試みとその崩壊」(東海大学出版会、1999年) 参照。
- 35) 家島彦一注5前掲書第1章「ジャーヒリーヤ時代のアラビア半島をめぐる国際商業ネットワーク」参照。
- 36) 吉水常雄『正倉院ガラスは何を語るか?』(中央公論新社、2009年)、あるいは同「工芸分野からみた古代イランの文化交流」井本英一編『アジア遊学 137 東西交渉とイラン文化』、勉誠出版、2010年) 参照。
- 37) 足利惇氏『世界の歴史 9 ペルシア帝国』(講談社、1972年) 参照。
- 38) 孫莉「薩珊銀幣在中国的分布及其功能」(『考古学報』2004-1) 参照。
- 39) 桑山正進『東方におけるサーサーン式銀貨の再検討』(『東方学報』54、1982年) 参照。
- 40) 韋正『魏晋南北朝考古』第5章「中外文化交流」(北京大学出版社、2013年) 参照。
- 41) 森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』第1章「北中国におけるソグド人の活動と聚落の形成」(関西大学出版部、2010年) 参照。
- 42) 張慶捷「北朝入華外商及其貿易活動」(張慶捷等主編『4～6世紀的北中国与欧亚大陸』(科学出版社、2006年) 参照。
- 43) 福島恵「北朝隋唐期におけるソグド人の東方移住とその待遇」(『唐代史研究』16、2013年) 参照。
- 44) 黄良瑩『北朝服飾研究』第4章「北朝民族融合与中古常服之形成」(国立歴史博物館、2011年) 参照。
- 45) 平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢 ―北周・千金公主の降嫁を中心に―」(『唐代史研究』12、2009年) 参照。
- 46) 松田壽男「鉄工としての突厥族の発展」(『松田壽男著作集 2 遊牧民の歴史』、六興出版、1986年) 参照。
- 47) 藤野月子『王昭君から文成公主へ ―中国古代の国際結婚―』第3章「五胡十六国北朝の時代における和蕃公主の降嫁」(九州大学出版会、2009年) 参照。

- 48) 隋王朝をめぐる東アジア国際関係を論じた研究は多いが、金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』第3章「隋唐交代と東アジア」(名著刊行会、2001年)は先行研究を整理した上で、従来、高句麗の立場に即して体系的な国際関係の把握を行う視点が欠けていることを指摘している。
- 49) 楊正道政権の顛末については、石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』第1部第3章「突厥の楊正道擁立と第一帝国の解体」(汲古書院、1998年)参照。
- 50) 森公章『「白村江」以後 —国家危機と東アジア外交—』第2章「百済の役」(講談社、1998年)参照。
- 51) イスラーム勢力の拡大過程は、P. K. ヒッティ(岩永博訳)『アラブの歴史』上(講談社、1982年)が比較的詳細に叙述する。
- 52) 古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係」(『朝鮮学報』107、1983年)参照。
- 53) 盧泰敦(橋本繁訳)『古代朝鮮三国統一戦争史』第Ⅱ部第4章「新・唐戦争と日本・吐蕃」(岩波書店、2012年)参照。
- 54) イスラーム勢力の中央アジア進出の過程については、稲葉穂「アラブ・ムスリムの東方進出」(堀川徹編『講座イスラーム世界史 3 世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所、1995年)、及び糸賀昌昭「長安とバグダード」(山田康夫編『東西文明の交流 2 ペルシアと唐』、平凡社、1971年)に詳しい。
- 55) 井上浩一他『世界の歴史 11 ビザンツとスラブ』第1部第2章「生まれ変わる帝国」(中央公論新社、2009年)参照。
- 56) 東潮・田中俊明編著『韓国の古代遺跡 1 新羅篇(慶州)』(中央公論社、1988年)参照。
- 57) 菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き —新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性—」(『史窓』66、2009年)参照。
- 58) 古畑徹注52前掲論文参照。
- 59) たとえば、森公章注50前掲書や、李成市「古代東アジア論再考」(『歴史評論』696、2008年)参照。
- 60) 菅沼愛語「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢 —多様な外交関係の形成とその展開—」(『史窓』67、2010年)参照。
- 61) 護雅夫『古代トルコ民族史研究 Ⅰ』第1編第4章「突厥と隋・唐両王朝」(山川出版社、1967年)参照。
- 62) 森安孝夫氏によれば、この頃、シルクロード東部の南部を唐が、突厥・テュルギッシュが北部を分け合う形で落ち着きを見せたとする。森安孝夫『シルクロードと唐帝国』第6章「突厥の復興」(講談社、2007年)参照。
- 63) 護雅夫『古代トルコ民族史研究 Ⅱ』第1章「古代テュルク民族史上の諸問題」(山川出版社、1992年)参照。
- 64) 唐の対吐蕃対策や高仙芝の活動については、伊瀬勢仙太郎『中国西域経営史研究』第6章「玄宗時代の西域経営(一)」(巖南堂書店、1955年)参照。
- 65) 前嶋信次「タラス戦考」(『東西文化交流の諸相 民族・戦争』、誠文堂新光社、1982)参照。
- 66) 前嶋信次注65前掲書「タラス戦考」参照。
- 67) 小杉泰『興亡の世界史 06 イスラーム帝国のジハード』第6章「イスラーム帝国の確立」(講談社、2006年)参照。
- 68) 糸賀昌昭注54前掲書第4章「長安とバグダード」参照。
- 69) ピレンヌ＝テーゼをめぐる論争の過程については、たとえば、家島彦一注5前掲書第2章「アラブ・ムスリム軍の大征服運動と新しいネットワークの形成」において、イスラーム研究の視点も交えて整理されている。
- 70) 佐藤彰一注7前掲書、及び同『ヨーロッパの中世 ① 中世世界とは何か』(岩波書店、2008年)参照。
- 71) 大月康弘「ピレンヌ・テーゼとビザンツ帝国 —コンスタンティノープル・ローマ・フランク関係の変容を中心に—」(『岩波講座世界歴史 7 —ヨーロッパの誕生—』、岩波書店、1998年)参照。
- 72) 金子修一「東アジア世界論」(荒野泰典等編『日本の対外関係 1 東アジア世界の成立』吉川弘文館、2010年)参照。

- 73) 川本芳昭「四～五世紀東アジアにおける天下意識 —中国政治思想の伝播との関連から見た—」(田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論』、すいれん舎、2006年) 参照。
- 74) 李成市注2前掲論文参照。
- 75) 廣瀬憲雄「日本史と東部ユーラシア 6～13世紀における政治的連関再考」(『歴史学研究』872、2010年増刊号)、及び同「東アジア世界論の現状と展望」(『歴史評論』752、2012年) 参照。
- 76) ジョナサン＝バーキー(野元晋・太田絵里奈訳)『イスラームの形成』第10章「初期イスラームにおける非ムスリム」(慶應義塾大学出版会、2013年)は、ユダヤ教・キリスト教・ゾロアスター教などの宗教共同体が、征服者であるムスリムとどのような関係を持ったのかについて簡潔にまとめている。
- 77) 前嶋信次注65前掲書「タラス戦考」参照。

(2013年10月30日提出)

(2013年11月21日受理)